熊本博物館所蔵の西南戦争関連遺物　その１

中原幹彦

はじめに

博物館の収蔵庫には長い間日の目を見ていない遺物がある。今回の資料は収蔵庫整理の際に偶然発見したもので、一部では知られていたようだが、具体的に紹介されたことはなかった。本稿は資料の重要性に鑑み、本遺物の存在を多くの方々に知っていただくために紹介し、次の詳細調査や展示につなげようとするものである。

なお、銃砲弾等については日本大学教授淺川道夫氏からご教示を賜った。

Ａ、遺物について

今回紹介する遺物は、熊本城出土の西南戦争に関係する銃砲弾類である。出土場所は飯田丸、くらがり門付近？、城内各所の 3 か所で、今回は飯田丸出土遺物を中心に紹介し、他は概要にとどめ詳細は次稿で報告する。

1、飯田丸出土

遺物ラベル「熊本城飯田丸共同便所前出土　小銃弾塊・砲弾・瓦片・木片等一括　1974（S49）.6・25（火）午後 5 時～6・26（水）午前 11 時　採集　明治中期以后建設？　旧陸軍便槽廃坑内投入物一括と推定されるもの。」

資料　多量のスナイドル未使用弾の塊や四斤砲弾など

2、くらがり門付近？出土

遺物ラベル「熊本城内電話線埋設工事坑出土くらがり門付近？砲弾（丸）破片 2 他、骨貝片？　1975（S50）.3・9（日）午後、熊本城管理事務所より受領」

資料　二十拇臼砲弾片 2 点

3、城内各所

遺物ラベル「不明（城内各地）以下「不明」」

資料　小銃弾類合計 64 点（小銃弾 52 点、拳銃弾 4 点、四斤砲霰弾子 7 点、徽章 1 点）

弾種は暫定的なもので、のちの検討で変更になる場合がある。西南戦争時として熊本鎮台と薩摩軍に分けたが明確ではなく、特に使用済エンフィールド銃弾は籠城時の鎮台の探射弾の可能性も十分にある。

ａ、西南戦争時　計 42 点

・熊本鎮台籠城軍資料　計 11 点

スナイドル未使用弾 1 点（弾頭のみ）、エンフィールド未使用キャスト弾で内凹部円錐形 3 点と円錐台形 6 点（全て弾頭のみ）、ルフォショー拳銃未使用弾 44 口径 9 ㎜針打式 1 点

・薩摩攻城軍資料　計 31 点

スナイドル銃弾 4 点（うち腔綫 3 条長スナイドル銃弾 1 点、弾頭木栓 1 点）、エンフィールド銃弾 12 点（うち腔綫 5 条短エンフィールド銃弾 4 点、プリチェット弾 1 点、キャスト弾内凹部円錐形 1 点）、ウエストリーリチャーズ銃弾 3 点（うち径 11 ㎜ 1 点、12 ㎜断面 8 角形？2 点）、スペンサー銃弾 2 点（うち 56-56、56-50 各 1 点）、シャープス銃弾 2 点、ツンナール銃弾 13 ㎜ 1 点、Ｓ＆W拳銃 32 口径銃弾 8 ㎜ 1 点、四斤砲霰弾子 11～13 ㎜ 7 点。

b、西南戦争以後　計 20 点

小銃弾は弾径 11 ㎜、底凹部形状はほぼ同一。先端の同様な潰れ方からみて射撃訓練に使用されたものと考えられる。シャスポー村田銃弾 3 点（腔綫 4 条、激しい潰れ内凹部 2 種類）、その他 3 点（潰れ方が同様で腔綫不明瞭 2 点と中空弾 1 点）、13 年式村田銃弾 12 点（うち未使用弾頭で金属薬莢痕と巻紙痕が認められるもの 1 点、腔綫不明瞭で先端潰れ状態が同様で内凹部 2 種類 6 点、腔綫 5 条で潰れは一様ではない 5 点）、26 年式 36 口径拳銃弾（口径 9 ㎜）2 点。

「射的場」は、明治 15 年（1882）『熊本鎮臺戰闘日記』明治 10 年 3 月 3 日武庫日誌「本日ヨリ歩兵營前ノ射的場ノ濠内ニ二個ノ坑倉ヲ穿チ」とあり、大正 14 年（1925）『熊本城史梗概』付図には二の丸北の空堀に「射的場」の記載があるので、西南戦争時にはこの場所が射的場だったのだろう。また、戦後の明治 13 年（1880）熊本全図、明治 32 年（1899）熊本市街全図、大正 4 年（1915）最新熊本市街地図、大正 13 年（1924）最近実測熊本市街地図などには、三の丸漆畑から旧片山邸にかけて大規模な射的場の記載がある。

c、その他　計 2 点

ゲベール銃弾（17 ㎜）1 点、十一年式軽機関銃部隊徽章 1 点

Ｂ、飯田丸出土遺物

飯田丸出土遺物は一見すると、何かよくわからないこげ茶色の塊だが、よく見るとその多くが西南戦争で主用されたスナイドル銃弾の未使用弾の塊である。最初に見た時の驚きは、筆舌に尽くしがたい。通常の発掘調査では西南戦争関連遺物は出土せず、激戦地の田原坂や山頭遺跡などごく限られた遺跡でのみ出土する。

スナイドル銃弾の薬莢筒部は薄い真鍮板と巻紙で構成され、底部には雷管を内蔵しベースは鉄製が多い。薬莢筒はスペンサー銃弾薬莢のような一体型ではなく強度もないつくりで、戦後 140 年以上が経過し土中にあるものは腐食して残存状態は極めて悪い。耕作などで土が動けば瞬く間に薬莢筒は壊れ霧散してしまう。比較的強度のある薬莢底部のみが出土するだけでも類例は少ないのに、もっと類例が少ない未使用弾が大量に塊で、ほとんど潰れもせずに砲弾類などと共に出土するのは稀有な事であり、極めて貴重である。おそらく、国内初の事例だろう。

1、観　察

飯田丸出土遺物は多くがスナイドル未使用弾の錆着集合体＝塊である。薬莢や雷管、エンフィールド未使用弾頭などと共に一体化し、四斤砲弾、ブロドウェル砲弾もある。全体が赤さびで覆われ部分的に火薬の黒色と緑青が見え、大小いくつかの塊に分かれて破片も多く一部はバラバラの状態である。スナイドル未使用弾は弾頭部の重さのため折損しているものも多いが、全体に薬莢筒の潰れはない。薬莢底

は鉄製がほとんどで、詰綿があり一部には黒色火薬の残存物が見える。弾頭は栓がついたままなので、内凹部の確認ができない。また、向きが不揃いのバラバラの状態で、並べられたような状態ではない。四斤砲弾はかつて見たことがないような哀れな姿である。

未使用弾の塊には、鉄鍋に集められ鉄鍋ごと正位で遺棄されたと推定できるもの、平坦面があり鉄錆に木目が写し取られ木箱に入れて遺棄されたと考えられるもの等があり、植物質のものも混ざる。全体が赤さびで覆われているのは、錆びやすい鋳鉄製の鉄鍋に正位で入れられ土中の水分が溜りやすかったことと、同じく鋳鉄製の四斤砲弾、薬莢の鉄製ベースが混在していたためと思われる。

出土状況はもともと現状のように数個の塊に分かれていたのか、本来はもっと大きな塊だったものが取り上げ時などに分割したのかは不明である。破片の接合作業を試みたが不足する部分があり、いまだに土中に多数の部位が残存していると思われる。

2、遺物の概要（単位㎝、数は表面に見えるもののみ）

塊１　大きさ 32×22×14 ㎝、重量 3694 g

・**種類**　スナイドル未使用弾多数、同薬莢少数、56-50 スペンサー薬莢 1 点、小バネ状のもの 1 点、鉄鍋片、竹棒（箸？）、口径約 9 ㎝の碗蓋の痕跡

・**状況**　形状は鍋の形を写し取っており、鉄鍋片も一部残存錆着し、鉄鍋に入れられていたのは明らかである。鍋底に碗蓋を伏置した上に植物質のものを入れ、その上に未使用弾などを山盛りに入れていたようだ。鍋底外面に土砂が付着しているので、廃棄坑底に置かれていたと推定される。薬莢が他塊より多く、薬莢筒を広げたものもある。残存率は 2/3 程度か。

塊２　大きさ 16×14×14 ㎝、重量 1950 g

・**種類**　スナイドル未使用弾多数、エンフィールド未使用弾頭 3 点(栓式)、未使用雷管 1 点

・**状況**　鉄鍋外面が錆着しており、鍋外にあったものである。広葉樹の木葉痕が多数の未使用弾の間にあり、樹種同定できれば遺棄の時期が絞り込める可能性がある。葦などの茎が長い植物質のものもある。

塊３　大きさ 13×11×9 ㎝、重量 787 g

・**種類**　スナイドル未使用弾多数、同薬莢数点、未使用雷管 1 点、径 3 ㎝の鉛弾？ 1 点

・**状況**　弾頭が多く残るので重い。潰れた薬莢があり、小銃弾は内凹部Ｂタイプ（長円錐台形）1 点、ＡＢ中間タイプ（円錐台形）1 点が確認できた。明確ではないが、撃針痕のある未使用弾＝不発弾がある。植物質や何かの角の圧痕がある。

塊４　大きさ 8×8×6 ㎝、重量 257 g

・**種類**　スナイドル未使用弾多数、同薬莢数点

・**状況**　平らに延ばした薬莢筒や潰れた薬莢がある。撃針痕のある未使用弾＝不発弾がある。径 1 ㎜ほどのタコ糸状のものが未使用弾にまとわりついている。

塊５　大きさ 7×7×6 ㎝、重量 184 g

・**種類**　スナイドル未使用弾多数、同薬莢数点、摩擦管？ 1 点

・**状況**　弾頭部残存が少ないので軽い。未使用弾は Pattern Ⅰ が 1 点。薬莢は潰れている。

塊６　大きさ 8×6×5 ㎝、重量 129 g

・**種類**　スナイドル未使用弾多数、鉄片、竹串状のもの

・**状況**　小銃弾は内凹部ＡＢ中間タイプ 1 点が確認できた。

バラ　重量　合計 1928 g

・種類　スナイドル未使用弾多数、同薬莢 1 点、エンフィールド未使用弾頭 2 点、径 3 ㎝の鉄弾？ 1 点、吊受 1 点

・状況　未使用弾は Pattern Ⅰ 3 点、撃針痕なし。小銃弾は先端木栓 1 点、内凹部Ｂタイプ 3 点がある。

砲弾１　長 16.9×径 7.7～8.5 ㎝　重量 2820 g（本体のみ）

・種類　四斤砲弾

・状況　デマレー着発信管及び木塞残存、信管には白色塗料も残る。弾殻表面は薄いフレーク状に剥れ、腔綫 6 条 2 段 12 点の旬翼もすべてフレークに付随し、本体には残存しない。残った弾殻は痩せこけ、丸みを帯びた形状を呈する。元は黄褐色の土錆に分厚く覆われ、植物質や木葉痕、緑青も付着する。

砲弾２　長 17.3×径 8.4 ㎝　重量 3092 g（本体と固着物）

・種類　四斤砲弾

・状況　デマレー着発信管残存。弾殻表面は薄いフレーク状に剥れ落ち、旬翼はフレークに付随し、底部片も剥落して底抜けの状態である。概数 200 点以上の大量の未使用雷管が塊状に、スナイドル薬莢痕、エンフィールド未使用弾頭 1 点も固着する。部分的に黒色火薬の残滓も付着する。未使用雷管入りの木箱＝弾薬箱？に頭部を下に入っていたらしく、平らな木目や木葉が鉄錆に写し取られている。固着物の残存は 2/3 程だろう。

砲弾３　長 15.5×径 6.9 ㎝　重量 2342 g

・種類　ブロドウェル砲弾

・状況　信管は先端を欠くも基部残存、表面は赤錆と火薬由来の黒色部分と一部緑青色があり、雷管小片が付着する。四斤砲弾に比して弾殻の腐食は少ない。腔綫 10 条幅 16 ㎜、鉛套 4 段突帯で麻紐痕がその間 3 段に認められ、麻紐痕 1 段は紐径 2 ㎜四条一組である。鉛套側面には着弾痕と腐食部分があり、間から弾殻がのぞく。

3、遺物の種類と数量

飯田丸出土遺物の現状での種類と数量をまとめる。小銃弾関連はスナイドル未使用弾多数、同薬莢少数、56-50 スペンサー薬莢 1 点、エンフィールド未使用弾頭 6 点、未使用雷管多数、径 3 ㎝の鉛弾？鉄弾？各 1 点。大砲弾関連は摩擦管？ 1 点、四斤砲弾 2 点、ブロドウェル砲弾 1 点。軍装品は吊受 1 点。その他は鉄鍋片、竹棒（箸？）、竹串状のもの、小バネ状のもの、鉄片、植物質のもの、口径約 9 ㎝の碗蓋の痕跡、木葉痕である。これらのうち、四斤砲弾 2 点、ブロドウェル砲弾 1 点は薩摩軍、残りはすべて熊本鎮台のものである。エンフィールド実包は紙薬包で、そのまま遺棄されたとすると薬包紙や火薬は何らかの痕跡が残るはずだが、未使用弾頭ばかりである。

塊 1 ～6 とバラのスナイドル未使用弾重量合計は 8929 g 、出土未使用弾は 1 点 41 g なので、約 218 発分に相当する。まだ、土中にも残存があるだろうから、300 発程度はあったことになる。

4、スナイドル実包について

スナイドル実包は明治 9 年から国産化が始まり、西南戦争では内凹部Ａタイプ英国製、Ｂタイプ推定国産をはじめ多くの新旧の種類の実包が実戦投入され、戦争前期の田原坂でも双方が出土し、山頭遺跡では 10 種類以上のスナイドル銃弾が出土している。明治 18 年以降の「スナイトル銃各種實包試驗成蹟」

の「實包百發ニ付不發彈ノ數」は 10 年英国製 1.37、10 年 6 月本廠製 32.32 である。この資料では国産には不発弾が多かったことが知られる。

教本などによると、スナイドル実包には Pattern I ～Mark IXなど数種類がある。Pattern I は「The unsuccessful」（不出来な）と記載され、薬莢底部は真鍮製一体型で薬底板角が丸く、機関部蝶番式ブリーチを後方に引いて排莢する際にかかりが甘くなるので敬遠されたとの教示を得た。山頭遺跡では政府軍陣地出土未使用弾のうち 18%が Pattern I で、発砲済薬莢では 4%以下である。最前線では Pattern I が嫌われていた実態が浮かび上がる。

スナイドル実包は運搬時に 10 発ずつ紙包装され、紐などで十字に縊り、440 発入あるいは 500 発入の木製弾薬箱に入れられる。実戦の最中に誤って落とす、不発や銃に適合しないなどの理由の他には、意図的に遺棄することはないと思われる。

今回のスナイドル未使用弾は鉄錆のため撃針痕が確認困難なので、現状では直接に判断しにくいものの、内凹部は確認数 6 点のみだが推定国産Ｂタイプ 4 点とＡＢ中間タイプ 2 点で英国製のＡタイプがない、不出来な Pattern I が含まれる、すべてがバラ状態の出土である。これらの遺物状況と前記の一般状況を考え合わせて、今回の未使用弾はその多くが不発弾と考えておく。

5、状況の整理と推理

今回の遺物は、通常の戦場遺物と比して大きく異なっている。第一にスナイドル未使用弾＝不発弾が量も遺物比率としても多すぎることが挙げられる。雷管も未使用である。砲弾は信管残存や旬翼の擦痕からみて薩摩軍発砲の不発弾である。戦場遺跡であれば、小銃弾、砲弾片、摩擦管、多くの薬莢、使用済み雷管などが出土するはずだが、これらは少ないか全く含まれていない。熊本城調査研究センターの飯田丸五階御櫓砲台跡の調査では、小銃弾、薬莢、砲弾片、摩擦管が出土した。

つまり、今回の遺物には、何らかの選択が働いていることが考えられる。重要なのはこれらが火薬残存の銃砲弾＝不発弾ばかりである点である。不発弾はいつ暴発するかもしれず、早めに回収処理しておかないと周囲に危険が及ぶので、不発弾だけを集めて土中に遺棄したと思われる。茶碗と箸？が入ったままの鉄鍋に藁などを敷き不発弾を集める。鉄と火薬は相性が悪いとされ、万が一のことを考慮して直接当たらないように間に緩衝材として植物を入れたのかもしれない。

回収時期は食事に必要な鉄鍋の存在から、各種物資が逼迫していた籠城中というより、熊本城開放後のあまり時間が経っておらず食料弾薬等も倉庫に満ちた頃で、かつ薩摩軍の反撃が十分に考えられる頃、4 月中旬から月末のことだろう。早急に次の戦いに備える必要から未だ緊張感が漂う中で、籠城戦での飯田丸一帯に散乱していたであろう不発弾を、兵卒に貸与され返却が必要なはずの吊受なども一緒に、あわただしく回収処理されたものと考えられる。

6、小銃弾不発弾関係者

『熊本鎮臺戦闘日記』には飯田丸の守兵は、2 月 21 日嶽ノ丸十三連隊第二大隊第三中隊（兵員 160 名）、砲兵配布表城内の項に野砲 2 門、臼砲 1 門。3 月 2 日守兵配置表に嶽ノ丸・本丸十四連隊第一大隊第四中隊（元は兵員 166 名）、大砲配置表城内に野砲 2 門、臼砲 1 門。3 月 27 日各隊防禦線配賦に下馬橋・嶽ノ丸十四連隊第一大隊第三中隊（元は兵員 167 名）。4 月 9 日各隊防禦線配賦に嶽ノ丸・下馬橋十四連隊第一大隊第三中隊である。これらの 3 個中隊が今回資料の関係者であろう。

7、その他のこと

飯田丸出土遺物から考えられることを追記する。鉄鍋については、再生可能なものを遺棄するというのは、一般ではありえず、米の飯が食える軍隊ならではのことであろう。大きさは推定径 32 ㎝、深さ 12 ㎝ほど、外面には煤が厚く付着する。飯茶碗蓋や箸？もあり、籠城中の食事状況を復元するには良い資料になる。また、鍋中の植物痕跡が胸壁に由来するものとすれば、その材料も明らかになる可能性がある。『熊本鎮臺戰闘日記』には 3 月 9 日「兵食炊爨ノ爲メ坪釜二個平釜二個ヲ一中隊ニ給ス」の記述があり、諸品を荷担するための籠や筵も支給されている。

今後は、本遺物の採集当時の日誌、写真、図面などの記録を探し出し他資料と合わせて、出土位置の特定やラベル記載の旧軍時代便槽位置の特定、あるいは銃弾塊を CT スキャンして、種類ごとの個数を明らかにするなどの作業が必要になる。また、200 発～300 発ものスナイドル不発弾が籠城中に生じたものとして、具体的に城中のどの範囲のものを集めたものかを知りたいところだ。今回資料の詳細な分析、調査、研究をさらに進めることで、籠城戦における具体的な戦闘の一端を知ることができるようになるかもしれない。

C、まとめ

今回紹介した 3 か所の遺物と『熊本鎮臺戰闘日記』（以下『日記』と記す）の検討の結果、西南戦争の銃砲弾等についての新しい知見を得ることができた。

1、薩摩攻城軍資料　小銃弾

城内各所で採集された小銃弾で使用小銃が判明した。長スナイドル銃、短スナイドル銃、短エンフィールド銃、ウエストリーリチャーズ銃、スペンサー銃、シャープス銃、ツンナール銃の 7 種で、『日記』3 月 13 日段山の戦二日日武庫日誌には「此小銃ハ其種類甚タ多ク大概「エンピール」「スナイドル」「ウルソン」及ヒ和銃等ナリ」とあり、ウィルソン銃、火縄銃を加えて、少なくとも 9 種類の小銃があった。

これらは戦争初期において薩摩軍が使用した小銃の一部だが、ツンナール銃弾は田原坂などの熊本県北部地域では現在のところ報告がない。このことについては、もともと銃数も少なく、激戦地では弾薬補充しやすいスナイドル銃やエンフィールド銃を優先して配備したからではないかとの教示を得た。なお、ツンナール銃弾は大分県や宮崎県などでは出土するので、今後は確認されるかもしれないし、その形が釣錘に似ていることから以前は銃弾の認識がなかったとの話もあり注意を要する。

大砲弾

薩摩軍の大砲数は『日記』では 6 門で、攻城戦にしては貧弱である。遺物とあわせてみると四斤山砲（榴弾と榴霰弾）、長四斤山砲、十二斤砲、二十拇臼砲、ブロドウェル砲があり、6 門に 5 種もの大砲が混在している。ちなみに、籠城軍は 2 月 21 日時点で 10 か所に野砲 6 門、山砲 12 門、臼砲 7 門の計 25 門、3 月 2 日大砲配置表では山砲 13 門で 9 か所に計 26 門、4 月 13 日には野砲 6 門、山砲 15 門、臼砲 8 門の計 29 門に増加している。

『日記』には飯田丸が盛んに砲撃された記事が多数みられる。砲弾不発弾も弾種は不明ながら、相当数があったようだ。3 月 18 日「日々ノ砲戰砲彈ノ欠乏ヲ慮リ、賊彈ノ破裂セサルモノハ悉ク之ヲ収獲シテ我カ用ニ供ス」や 4 月 5 日病院日誌「賊彈ノ我カ病院ヲ發射スル其未タ破裂セサルモノ二十個ヲ収メ之ヲシテ本臺ニ送ラシム」の記載がある。

ブロドウェル砲は薩摩軍の装備が知れる『新編西南戦史』「ろ獲兵器弾薬表」には記載がないためか、今までは知られていなかった。今回の砲弾出土で薩摩軍がブロドウェル砲を使用したことが判明した意義は大きい。政府軍の「銃砲損廃表」ではブロドウェル砲は 6 門が配備され、うち 2 門が別働第二旅団での損廃、砲弾は 6,300 発支給のうち消耗数は 4,233 発、南関砲廠 3,010 発（熊本城連絡までの第一、第二、第三旅団消耗の合計数)、第四旅団 414 発、別働第一旅団 136 発、別働第二旅団 673 発である。

二十拇臼砲弾は、2 月 27 日武庫日誌「本日賊二十拇臼砲ヲ安巳橋近傍ニ備ヱ、晝夜間斷ナク之ヲ我城中ニ放ツ」、3 月 6 日「賊安巳橋近傍ヨリ二十拇臼砲ヲ以テ我カ千葉城ノ守地ヲ射撃スルコト十一發」、4 月 5 日武庫日誌「安巳橋近傍ノ賊壘ヨリ射撃セシ二十拇臼砲ノ彈丸、頻ニ我カ飯田丸及ヒ嶽ノ丸ニ落下シ、甚タ危殆ナルヲ以テ、厚サ一寸許ナル木板數十枚ヲ以テ該所土倉(彈藥挌納所ナリ)ノ屋ヲ重蔽ス。且賊彈ヲ飯田丸野砲々廠ニ発射セルヲ以テ、彈藥車ノ各部分並ニ車輪四個ヲ損ス」とある。今回紹介の「くらがり門付近？砲弾」もそのうちの 1 発だろう。

大砲にも小銃と同様な教示が当てはまる。銃砲種類の多さは「銃砲はあるが弾がない」あるいはその逆の状態に陥る可能性があり、弾薬補給の遅延と混乱に直結して戦闘では不利に働く。弾薬補充の重要性については、薩摩軍の戦術理解のみならず、両軍の戦闘遂行、ひいては西南戦争全体の理解にもつながる重要な事柄である。

2、熊本鎮台籠城軍資料　スナイドル不発弾

熊本鎮台のスナイドル実包籠城前備蓄数は 1,285,800 発『日記』「熊本鎮臺彈藥消耗員數表」、籠城中消耗数は 630,830 発『新編西南戦史』「弾薬消耗表」である。消耗数に対する割合は不発弾 300 発だと 0.05%、スナイドル実包の製造地毎の割合は不明ながら、この割合は英国製の不発弾 1.37%、国産 32.32%と比べて少ない。しかも、出土品は国産と推定される実包である。仮に 1%で 6,300 発、5%で 31,500 発程度にはなる。すべてが土中遺棄されていないにしても、今回の不発弾数は少なすぎる。

籠城中の弾薬庫は 2 月 23 日以来、二の丸北の空壕の射的場にあった「而シテ砲銃彈藥ハ之ヲ本城空壕ノ射的場ニ置ク。此地彈丸ヲ避クルニ適スレハナリ」が、3 月下旬になると大雨が降り雨水が浸入するようになった。よって場所を移すことになるが、雨水対策などは施されていたと思われるものの、このことも不発弾の一因として考えられる。

また、スナイドル弾薬は節約されていた。3 月 16 日武庫日誌には「「スナイドル」銃彈藥ノ大ニ減少スルヲ覚フ」とあり、不発弾の多さも関係しているのかもしれない。4 月 2 日武庫日誌「各種ノ弾藥餘ス所已ニ甚タ多カラサルヲ以テ本臺ニ請ヒ、各隊ニ告クルニ注意シテ徒費スヘカラサルヲ以テス」。4 月 11 日になるといよいよ苦しくなり、武庫日誌「貯藏品已ニ竭クルニ垂ントス。(中略) 而シテ「スナイドル」實包ハ四十九万五千五百發、「エンピール」實包七十万零一千發ニ過キサルナリ」状況で、スナイドル銃弾を籠城兵 1600 名（突囲隊等除く）に支給するとしたら、一人 300 発ほどにしかならず極めて少ない。通常の二三日分で、良品はすでに突囲隊に持たせてある。

一方で、突囲隊に際しては、3 月 29 日武庫日誌「突圍ノ準備ヲ以テ、小銃及ヒ大砲ノ精良弾藥ヲ撰ヒ」、4 月 6 日武庫日誌「兵士ノ携帯銃ハ假令小損タリト雖モ必ス之ヲ交換セシメ、至當ノ彈藥ヲ該隊ニ支給セシムルニ決ス」とあり、良品弾薬は天守台下の堅牢な石門に貯蔵するなど、通常戦闘とは異なる極めて重要な任務の際には特に「精良」「至當」の弾薬を携行させ、不発を極力少なくすることがおこなわれていたようだ。

エンフィールド未使用弾頭

「熊本鎮臺彈藥消耗員數表」備考欄に「エンヒール實包ノ消耗數ヨリ雷管ノ消耗少ナキハ實包ノ藥包破烈等□リ癈彈多キ故ナリ」と記され、廃棄弾が多かったことが知られる。消耗数はエンフィールド実包 935,200 発、雷管 746,400 個、差は 188,800 発で約 2 割が廃棄弾だったことになる。この数は戦争全期間中のもので、籠城中の状態を示すものではないが、一定の傾向は示していると考えられる。総じてかなり多量であり、そのごく一部が出土する。弾頭だけが今回紹介資料に含まれているのは、紙薬包が破れて使用不能の実包を廃棄する際に、弾頭と装薬は別々に処理されたためであろう。

飯田丸

出土地の飯田丸には兵器庫があった。『日記』2 月 24 日武庫日誌「焼彈飛ヒテ我カ飯田丸ノ兵器庫ニ墮落シ」、2 月 28 日武庫日誌「賊彈飯田丸兵器庫ニ落下シ大ニ庫内ヲ破壊ス」、3 月 16 日武庫日誌「花岡山及ヒ山崎等ノ賊彈我カ飯田丸ノ兵器庫ニ落下スルモノ未タ全ク減セス」、3 月 21 日武庫日誌「我飯田丸ノ兵器庫ヲ砲撃ス。屋上爲メニ破壊シ恰モ蜂巣ノ如シ」があり、攻撃を頻繁に受けているのに兵器庫は移動されていない。弾薬類は時々移動されている。

銃器修理に関しては、2 月 22 日武庫日誌「飯田丸ヲ以テ支給場トシ、銃工若干名ヲ派遣シ小損ノ器具ヲ修理セシム」、2 月 28 日「當時銃工ヲ督シ頻リニ「スナイドル」銃ヲ修理セシム」の記載がある。スナイドル銃が多用されたこと、修理が必要なスナイドル銃も多かったことがわかるが、不発弾の原因に銃弾だけでなく、小銃にも原因があった可能性を考える必要がある。

3、西南戦争以後

一方では、今回紹介資料の全てが西南戦争に直接かかわる遺物ではないことも明らかになった。田原坂などの野戦場は戦闘時だけに軍事遺物が生成されるので資料の純粋性は高いが、熊本城は戦前戦後とも軍事基地だった。

熊本城は近代では鎮西鎮台が明治 4 年（1871）に設置され、明治 6 年（1873）熊本鎮台と改称、明治 8 年（1875）熊本鎮台歩兵十三連隊、砲兵第六大隊設置、明治 10 年（1877）西南戦争、明治 21 年（1888）第六師団に改組、明治 27・28 年（1894・95）日清戦争、明治 37・38 年（1904・05）日露戦争、昭和 16 年（1941）太平洋戦争を経て、昭和 20 年を迎えるまで長い間軍事基地として機能した。

銃弾類は西南戦争前から存在し、戦後も使用されている。熊本城から出土するスナイドル銃弾やエンフィールド銃弾などがすべて、戦時の籠城時のものと考えるのは早計である。スナイドル銃は西南戦争のときには新式銃であったが、村田銃が開発されると次第に入れ替わり準制式銃になった。村田銃が制式採用されたのは明治 13 年だが、全国の鎮台に配備されるまでは時間がかかっている。

おわりに

熊本城出土の明治時代軍事遺物は大きく 3 期に分けて考える必要がある。1 期・西南戦争以前　2 期・戦中（籠城戦中とその後の戦争終結までの間は要細分）、3 期・戦後である。このうち 1 期と 3 期は平時の状態を示し、2 期は戦時の状況を示す。平時と戦時の違いを知ることは、遺物のありようや識別する際には必要である。出土状況や層位を詳細に検討し、遺物が西南戦争に直接かかわるもの＝時期が特定できる籠城戦時の遺物であるのか否かを個別に判断することが重要である。

今回の飯田丸のような廃棄坑や埋納坑は城内いたるところにあったと推定されるので、土地を掘り下

げない金属探知機、地中レーダー探査などの調査が望まれる。『熊本鎮臺戦闘日記』2 月 23 日武庫日誌「飯田丸ヨリ平左衛門丸ニ通行スヘキ屈曲セル所及ヒ地蔵門跡ナル地ニ坑倉ヲ穿チ、以テ各種ノ弾薬ヲ轉移シ」、3 月 7 日会計日誌「金庫ヨリ悉ク金函ヲ出ス、後チ之ヲ暗道途中ニ埋ム」などの記載があり、城内千葉城町の調査でも土坑から一括して、明治時代前半の密に重なり並べられた状態で多量の陶磁器と 2 点の鉄桶の内外に軍用天幕の鉄製保持杭（ペグ）、工具、鉄轡、未開封缶詰などが出土している。場所は鎮台倉庫敷地東端である。

また今回、図らずも不発弾の意義を考えるよい契機になった。不発弾は常に付き纏う死の影だったといえる。籠城戦終盤、城の兵卒は節約と不発の焦燥に留まり、侵襲隊と突囲隊は決死の覚悟。籠城兵卒全員が生死の境にいた。籠城中の幾多の戦いを生き抜き、4 月 14 日の開城の瞬間を迎えたことは、いやがうえにも熊本鎮台兵の一体感を高める。この後の戦争中、熊本鎮台は旅団に属さず、したがって大隊や中隊ごとに分割もされなかったのは、こうした事情もあると思う。「熊本城籠城戦」は今一度、きちんと見つめなおす必要がある。

こうした一つ一つの資料を丹念に調査する地道な積み重ねで、埋もれていた熊本城の歴史の別側面に光を当て、城の違った魅力を再発見することができるだろう。

引用参考文献

1882　『熊本鎮臺戦闘日記』　1977 復刻　東京大学出版会

1962　『新編西南戦史』陸上自衛隊第八混成部隊

2014　鶴嶋俊彦ほか　『熊本城跡発掘調査報告書 1―飯田丸の調査―』熊本城調査研究センター報告書第 1 集　熊本市熊本城調査研究センター

2017　美濃口雅朗「Ⅳ.資料紹介　熊本城出土の近代陶磁器一括資料―新出資料の紹介―」『熊本城調査研究センター年報 3』熊本市熊本城調査研究センター

2018　山本達也『西南戦争の弾薬―火砲弾薬編―』全日本軍装研究会

2018　山本達也『西南戦争の弾薬―小火器弾薬編―』全日本軍装研究会

第 1 図　熊本城全図
熊本城守城部隊配備要図（其一）
明治十年二月二十二日二十三日
ニ於ケル　『熊本城史梗概』（部分）
昭和 2 年　熊本城址保存会

塊１　上面

塊１　側面

塊 1　部分

塊 4

塊 2

塊 5

塊 3

塊 6

砲弾１　四斤砲弾

砲弾２　四斤砲弾

砲弾３　ブロドウェル砲弾

吊受

砲弾２に固着する未使用雷管と銃弾

二十拇臼砲弾片

各種小銃弾